『偏愛彩色ヴェルドール』

■コンセプト

自信をつけさせられ必要とされる。

■登場人物

▼新羅 柚樹(しんら ゆずき)

・年齢 22歳

・身長 163cm

・一人称 ボク、二人称 キミ

・職業 ロリータ系ブティックオーナー(店舗に自宅が併設している)

・趣味 服やアクセサリー等のファッション系のデザインを考えること

・服装 かわいい物が好きなので、ロリ服の方が好きだが一般的な男性の格好をしている日もある。(※ボーイッシュ寄りの男の娘)

・彼について……彼の場合は女になりたいというわけではなく、好きな格好をしたいタイプ。女性らしい・男性らしい格好どちらの自分も自分だと思っている。女になりたいというわけでも男のままでいたいというわけでもなく、固定概念に囚われたくない。

▼ヒロイン

・年齢 23歳

・社会人、かわいい服は似合わないと思い込んでいるけど興味がある。本当は着てみたいけど大人っぽい服になりがちで、可愛いものを纏うことに抵抗を抱いている。

▼あらすじ

可愛い服に興味はあるが着ることへ苦手意識を持っている貴女。
付き合いたての彼氏である柚樹ことユズくんはブティックのオーナー。
彼が見立てた洋服で来店するようにとお願いをされていた貴女は言われた通り、
彼が用意した可愛い服に身を包んで訪れる。
嬉しそうに駆け寄ってきた彼に案内されながら試着室へと入り…

○トラック1　来店・試着室でお着替え・視姦羞恥プレイ

●収録区切り①

■場所：柚樹のお店『ヴェルドール』・フロア
■時間：昼ぐらい

――ヒロイン、柚樹のお店『ヴェルドール』へ入店する

（SE：入店を報せるドアに付いたベルの音）

DHM：⑩
柚樹「（※接客ボイスからヒロインを見て優しげなトーンへ）
いらっしゃいませ、ボクの城『ヴェルドール』へ……って、キミかぁ。
えへへっ、待ってたよ。付き合ってから初めての来店だね」

（SE：柚樹が嬉しそうに駆け寄って来る足音）

DHM：①
柚樹「改めて、ようこそ『ヴェルドール』へ。
今日の格好もすーっごく可愛い！
やっぱ、キミのことを誰よりも大好きなボクが見立てただけあるなぁ。
キミにはね、絶対絶対その服が似合うって、
一目見た時から思ってたんだ！」

ヒロイン「そ、そうかな？
こういう可愛いの着たことないから、あんま自信無くて……」

柚樹「え、自信が無い？　そんなに似合ってて可愛いのに？
もうっ！　またそんなこと言ってー。
お洋服もお化粧も、みんな好きに楽しんでいいし、
誰にでも似合うスタイルが絶対にあるんだから、
そんなこと言わないの」

ヒロイン「誰にでも似合うスタイル……」

柚樹「それに、キミのそのコーディネートをしたのが誰だか忘れてない？
　このお店のオーナーであり、有名人からも服やメイクの依頼が来る、
　ファッション界の『ユズ様』であるこのボクだよ？

（※自信満々な表情から、「てへぺろ」な表情に変わる）
　あ……キミを最も愛する恋人って、付け加えるの忘れてた」

ヒロイン「あ……ははっ。ユズくん、凄い自信……さすがだなぁ」

柚樹「（※笑うヒロインを見て嬉しそうに）
　ふふっ、凄い自信でしょ？
　こんなボクだって、『男の娘（おとこのこ）』って言葉を、
　「おとこのむすめ」ってそのまま読んじゃってた時もあるんだから」

ヒロイン「えっ、ユズくんにもそんな時があったの……？」

柚樹「この話は……内緒ね？
　今では『男の娘（おとこのこ）』界隈でだいぶ有名なこのボクだって、
　最初から完璧だったわけじゃないよ。
　だからキミも、これから少しずつ色んなオシャレを知って、
　可愛い服もかっこいい服も着たいように着て、
　どんどん自信を付けていけばいいんだよ」

ヒロイン「そ、そっか……」

柚樹「（※ヤンデレモードＯＮ）
　キミの可愛さを引き出すのはボクの役目だし、
　キミの可愛い瞬間を最初に目にするのは恋人であるボクだけの特権。
　キミも、ボクから「可愛い」を教わりたくて、
　今日ここに来てくれたんだもんね」

ヒロイン「う……う、ん」

柚樹「えへへっ、ありがとっ！
　今日のために勇気を出してその服を着てくれたんだもんね。
　ああ、あとさ……」

――柚樹、ヒロインの方へ顔を思い切り近付ける

ＤＨＭ：⑦寄り

柚樹「（★男モード寄りの声で）
服と一緒に渡した下着も……ちゃんと着てるってことだよね？」

ヒロイン「っー　う……うん……着て、る……」

ＤＨＭ：①

柚樹「（※ヤンデレモードＯＦＦ）
わっ、ホントに着てくれたんだぁ、嬉しい～！
じゃあこのままお店閉めるからさ、
今日は二人っきりで、『可愛い』をたっぷり教えてあげる」

ヒロイン「なんだか緊張しちゃうな……」

柚樹「緊張しちゃう？
ふふっ。緊張してるってことはさ、
それだけボクと真剣に向き合ってくれてるってことだもんね。
いい加減な気持ちだったら緊張なんてしないじゃない？
だからそんな、可愛いお顔を真っ赤にするほど緊張してくれて、
すっごくすっごく嬉しいよ、ありがとう」

ヒロイン「あ、ありが……と。
私こそ、あの……とっても嬉しいよ」

柚樹「……キミのお友達には感謝しなきゃなぁ。
このお店にキミを連れてきてくれて、ボクとキミを出会わせてくれた。
最初はキミさ……ボクのこと完全に女の子だと思ってたんだよね。
男性が苦手で、ボクが男って知ったら凄く驚いて……
なのにボクと付き合うって決めてくれてさ」

ヒロイン「それは……ユズくんは、
男とか女とかそういう次元じゃないっていうか……」

柚樹「性別の垣根を超えて、ボクと向き合ってくれてるってことだもんね」

――柚樹、ヒロインを抱き締める

ＤＨＭ：③寄り

柚樹「ありがとう、大好きだよ。ボクだけの愛しい恋人さん。
　試着室にとっても素敵なお洋服を用意してあるから、
　キミにぜひ着てほしいんだ
　ね……おいで？」

ヒロイン「……っ」

――柚樹、ヒロインの手を引いて試着室へ

●収録区切り②
■場所：柚樹のお店『ヴェルドール』・試着室
■時間：昼ぐらい
◆補足：試着室はかなり広めの扉で入る個室タイプ

――ヒロイン、試着室で服を脱ぐ

（SE：試着室の中で服を脱ぐ＆着る音）
（SE：軽いノック音）

DHM：⑬／扉越しの距離感
柚樹「どうー？　お洋服、着れたー？」

ヒロイン「え、あっ、えっと……」

柚樹「なかなか出て来ないから心配してたんだけど、
　もしかして着方がわからない服あったぁ？」

ヒロイン「そ、そうじゃなくて、あの……」

柚樹「んー……えへへっ。
　恋人特権で、突入だー！　おじゃましまーす」

――柚樹も試着室へ入る

（SE：試着室の扉が開き閉まる音）

ヒロイン「あ、あ、あの、あのっ……」

DHM：⑨
柚樹「（※ヒロインを見て可愛さに感動する）
　え、え……
（※少しの間の後、女子特有の甲高い声での感情の爆発）
　かわいぃ～～～～～～ッ！」

ヒロイン「……えっ」

柚樹「(※やや早口め)
うそうそうそっ！ こんなに可愛くなるなんて嘘でしょっ？
最初はゆったりめのシルエットにしようかなって思ったけど、
キミが前に自分の体型が気になるって言ってたから、
じゃあメリハリがハッキリするコルセットタイプにしようと思って、
それでね？ 甘めやゴシック系も絶対イイって自信あったけど、
ここはあえて冒険してスチームパンク意識した方にして正解～！
やっぱボクって天才だ！
キミの良さを最高に引き立てられるコーディネートができるのは、
天才な恋人のボクだけ！」

ヒロイン「えっ……と……」

柚樹「(※目を丸くしているヒロインを見て我に返る)
んんっ、ごめん。お洋服のことになるとつい……」

――柚樹、扉の前からヒロインの傍まで移動する

ＤＨＭ：⑨→①

柚樹「けど、自分の恋人が最高のメイクアップを見せてくれたんだもん。
喜ばない理由がないよね～、えへへっ」

ヒロイン「ユズくん……でも……」

柚樹「……どうしたの、浮かない顔しちゃって？
まさか、この期に及んで自分には似合わないなんて思ってるの？」

ヒロイン「思っ、て……る、ごめん」

柚樹「もーう！ 似合わないって思うのダメ！ 謝るのもダメ！
自信が無いキミも大好きだし、そんなキミだからこそ、
もっともっとお洋服を通して自信を持ってもらいたいんだよ？
(※優しく囁く)
……ねえ、ボクの言葉を信じてほしいな。ほら、鏡の方を見てみて？」

――柚樹、ヒロインの背後へと移動し一緒に鏡を見る

ＤＨＭ:⑥

柚樹「鏡に、すっごく可愛いキミが映ってるでしょ？」

ヒロイン「や、やだ……ユズくんと並んだら私なんか……」

柚樹「ボクと並ぶのが、嫌？　恐い？　恥ずかしい？
　ねえ、そんなこと思わないで？
　よく見てよ。鏡に映ってる素敵で可愛いキミのことを」

ヒロイン「……」

柚樹「ボクが用意したお洋服をしっかり着こなして、
　普段とは違うキミを見せてくれてるよね。
　それにキミの顔……照れて恥ずかしそうにしてるけど、
　それでもやっぱり嬉しそうじゃない？」

ヒロイン「え……」

柚樹『自分にはこんな可愛い服似合わない』なんて言いながらも、
　本当は何処かで『着てみたい』って気持ちがあるでしょ？
　このボクがそれを見抜けないと思う？
　ましてや自分の愛しい恋人のことだもん。わからないわけないよね」

ヒロイン「あ、うぅ……」

ＤＨＭ:⑦／背後から

柚樹「ね……正直に言って？
　ホントはこういうお洋服着れて、嬉しいんでしょ？」

ヒロイン「う……う、嬉しい……です」

柚樹「あはっ。やっぱり嬉しいんだ？　良かったぁ。
　素直なイイ子に……ご褒美あげちゃう」

（★ＤＨＭ：⑦
　耳にバードキス＆軽く耳責め／３秒）
（★微笑と吐息混じりで）

ヒロイン「ひゃっ！　ゆ、ユズくん……！」

ＤＨＭ：⑥
柚樹「えへへっ、反応も可愛い～。
　あのね、ボクね、恋人ができたらしてみたいって思ってたことがあるんだ」

ヒロイン「してみたいこと……？」

柚樹「えっとね？
　んー、一言で表すならぁ、『お人形さんごっこ』って言うのかなぁ。
　恋人のキミに、今日はボクのお人形さんになってほしいんだ」

ヒロイン「お人形……？　それってどういう……？」

柚樹「何するか知りたい？　気になっちゃう？
　それはねー……してみてからのお楽しみ、だよ」

ＤＨＭ：⑦寄り
柚樹「（※甘えておねだりするように）
　ねえ、お人形さんごっこ……ダメかな？」

ヒロイン「……っ！　い……いい、いい、けど……」

ＤＨＭ：⑥
柚樹「え、いいの？　ホントに？
　わーい、やったぁ！　ありがとう～！
（※無邪気に喜んだ後、ヤンデレモードＯＮ）
　……じゃあボクの可愛いお人形さん。ちゃんと鏡の方を見て？」

ヒロイン「……う、ん」

柚樹「鏡に、顔を赤くさせた可愛い子が映ってるのがわかる？
自信が無くて、でも素敵な姿になる憧れを持ってて、
ボクっていう最高に素敵な恋人がいる、
可愛い可愛いお人形の姿が見えるでしょ？
このお人形さんにね、いかにボクから愛されているのか、
今日はたっぷり教えてあげようと思うんだ」

――柚樹、背後から抱きしめるようにヒロインの体に触れていく

ＤＨＭ：⑦寄り

柚樹「（★男モード寄りの声で）
今からボクが触れるところ、意識して？」

ヒロイン「え……あっ……」

柚樹「（※気持ちゆっくりめ）（★男モード寄りの声で）
服の上からでもわかる？
ボクがどれだけキミのことを愛しているのか。
ここも、ここも……キミが自信無いって言う全部のところを、
ボクはとっても好きなんだよ？」

ヒロイン「んっ……ぅ」

柚樹「たぶんボクね、女の子として産まれたなら、
キミみたいな子になりたいのかもしれないって思うんだ。
こうやって、抱きしめるように体中をなぞられて、
恥ずかしさの中で少しずつ少しずつ恋人から愛されてることを感じて、
どんどん可愛い顔をしていくキミは……まさに理想の存在なのかも」

ヒロイン「ユズ、くん……」

柚樹「ふふっ……最初からそのつもりだったけど、
思ったより早くエッチな気持ちになっちゃったなぁ」

331 ヒロイン「え……？」
332
333 柚樹「抵抗しちゃダメだよ？
334 今日のキミは、ボクだけの可愛いお人形さんなんだから」
335

○トラック2　着衣プレイ・言葉責め・手マン・クリ責め・耳舐め

●収録区切り③

■場所：柚樹のお店『ヴェルドール』・試着室

■時間：昼ぐらい

――柚樹、服の上からヒロインの体を愛撫し始める

ヒロイン「ユズくん、あ、あの……っ」

ＤＨＭ：⑥

柚樹「（※ヤンデレモードＯＦＦ）
ん、どうしたのかな？
恥ずかしい？　それとも……まさかボクが、
恋人の可愛らしい姿を見て欲情しないとでも思った？」

ヒロイン「そ、それは……」

ＤＨＭ：⑦寄り

柚樹「（※背後からヒロインの耳へ吐息をかける）
ふふっ……心臓の音、凄ぉい。いっぱいドキドキしちゃってるね。
服の上からでもほら……乳首硬くなってるのわかっちゃうなぁ」

ヒロイン「やっ、んぅっ……」

柚樹「気持ちいい？
服の上からだから、もうちょっと強めがいいかな？
指先で強めに、カリカリ、カリカリ……ふふっ、どんどん硬くなってる。
（★ＤＨＭ：⑦で耳舐めしながら）
乳首ビンビンに立てちゃって……
ねえ、ボクよりエッチな気持ちになってない？
まだ直接触れてるわけでもないのに、
こんなに乳首硬くさせちゃってさぁ……
あれぇ？　なんで太もも擦り合わせて腰揺らしてるのぉ？」

——柚樹、ヒロインのスカートの下に手を潜り込ませ下着の中へ手を入れる

ヒロイン「ひっ……あー」

ＤＨＭ:⑦寄り

柚樹「あー、下着の中、もうヌルヌルだ～。
　エッチな蜜が、ボクの指に絡みついてるぅ～」

ヒロイン「あっ、あっ、だ、めっ……」

柚樹「(※ヒロインに手マンしながら)
　そういえば前にさ、ボクがネイルしてないのを意外って言ってたよね？
　今……正解がわかったでしょ？
　キミのこの、やわらかぁい部分をさ、
　こうやってクチュクチュ触る時、ネイルがあったら傷付けちゃうからね。
　ふふっ……今までは相手の為にネイルできないことを、
　嫌に思う時もあったのに……
　キミとこうして触れ合う為なら、ネイルなんて後回しに思えちゃう」

ヒロイン「んっ、ぅう……ゆ、ユズく……」

柚樹「ふふっ、まだ触れてるだけなのに、ビチョビチョなんだからぁ。
　キミの可愛いクリちゃん何処かな～？
　あ、これ？　アハハッ、指で撫でた瞬間、体ビクッてさせちゃって。
(★ＤＨＭ:⑦で耳舐めしながら)
　キミって体の方もすっごく素直なんだね……
　そういうところも大好きだよ」

ヒロイン「あっ、ああ……指、だめ、だめぇっ」

柚樹「(★ＤＨＭ:⑦で耳舐めしながら)
　ボクだけの特別可愛いお人形さん。
　クリちゃんコリコリされる度に腰が揺れちゃってるねぇ？
　このまま中に指入れて、ぐっちゃぐちゃに掻き回してあげよっか？」

ヒロイン「だ、だめ……あ、んっ」

408 ＤＨＭ:⑦寄り
409 柚樹「今、『だめ』って言った？
410 　こんなに気持ち良さそうにしておいて、嘘つくの？」
411
412 ヒロイン「だって……お、お洋服、汚れちゃう、から……っ」
413
414 ＤＨＭ:⑥
415 柚樹「（※予想外のヒロインの言葉に驚き、しばし間を置いて）
416 　ふっ……ふふっ、あはははー
417 　やだ、もうっ……こんな時に、お洋服が汚れる心配してくれるの？
418 　それってボクがあげたお洋服だからだよねぇ？」
419
420 ヒロイン「う、ん……」
421
422 ＤＨＭ:⑦寄り
423 柚樹「……あぁ
424 　ボクね、キミのそういうところが、愛しくてたまらないんだよ。
425 　初めてこのお店に来てくれた時も、『ユズ様』であるボクより、
426 　お洋服たちの方を見てくれてたよね。
427 （※ヤンデレモードＯＮ）
428 　キミのこと、好きになって正解だった。
429 　ああ、ダメ……こんなに優しくて可愛くて愛しいキミに、
430 　これ以上手加減なんてできないよぉ……」
431 （※ヤンデレモードＯＦＦ）
432
433 ヒロイン「ユズ、くん……？」
434
435 ＤＨＭ:⑥
436 柚樹「素敵なお洋服の次は、
437 　ボクが着てってお願いした下着姿を見せてほしいな」
438
439 ヒロイン「え……？」

●収録区切り④

ＤＨＭ:⑥
柚樹「スカート、ゆっくり持ち上げて？
（※固まるヒロインを鏡越しに見ながら）
うん？　緊張してるの？　ふふっ、可愛いなぁ、もう。
でもさ、女の子同士でお着替えするのは普通でしょ？
ほら、言ってみて？
『ユズちゃん、私の下着、見て下さい』って」

ヒロイン「そん、な……」

ＤＨＭ:⑦寄り
柚樹「（※囁きかけるように）
……言ってごらん？」

ヒロイン「っ……！
ゆ、ユズ、ちゃん……私の、し、下着……見て……下さ、い」

ＤＨＭ:⑥
柚樹「あはっ、上手に言えたね、可愛い～！
そのまま、ゆっくり、ゆーっくりスカート持ち上げてみて？」

ヒロイン「……っ」

――ヒロイン、スカートを持ち上げ下着を鏡越しに見せる

柚樹「わ、下着よく似合ってる～！
それに、顔赤くさせて恥じらいながらさ、
スカート持ち上げて自分の下着見せてるの、すーっごくエッチだね」

ヒロイン「やっ……だ、だってユズくんが……」

柚樹「あ、だーめ。ちゃんとスカート持ち上げて？
それに今は『ユズちゃん』って言わなきゃ。
罰としてその体勢キープしててね？」

ヒロイン「えっ……」

――ヒロイン、スカートを持ち上げたまま再び柚樹から手マンをされる

ＤＨＭ：⑥

柚樹「（★手マンしながら）
下着の中、やっぱりぐちゅぐちゅだぁ～。
ふふっ、さっきよりなんか敏感じゃない？
（※ヒロインがスカートを下げようとしているのを見て）
こーら。スカート下げちゃダメ。
今日はボクのお人形さんになるって約束したんだから、
スカート上げて、鏡越しに下着姿を見せ付けながら、
ボクにおまんこクチュクチュされるのちゃんと見てるんだよ？」

（★手マン／５秒）

ヒロイン「ひっ、ぁ……ユズ、ちゃ……」

柚樹「エッチな声、いっぱい漏れてるぅ。
良かったね、お店貸し切りにして。
じゃなかったらキミのはしたない喘ぎ声も、
びっちょびちょに濡れたおまんこの音も、
試着室の外まで全部丸聞こえだったよねぇ」

ヒロイン「やっ、い、言わないで……ぁあ！」

柚樹「脚もじもじさせて可愛い～。
言われた通りスカート持ち上げてて偉いね。いい子いい子。
（※ＤＨＭ：⑦寄り）（★男モード寄りの声で）
ご褒美に、またクリちゃん可愛がってあげる。
イクまで続けるから、ちゃんと鏡見てるんだよ？」

（ＳＥ：クリ攻め（手マン）の水音）

ヒロイン「ひぃっ、いいいいい！」

ＤＨＭ:⑦
柚樹「クリちゃん可愛がられてどう？　気持ちいい？
　じっくりこねこね、こねこね……ふふっ、どんどん蜜が溢れてくるぅ。
　ほら、鏡見て？　トロトロのアヘ顔浮かべた最高に可愛いキミが映ってる。
　あ、またお手手とスカートが下がってるよ？
　悪い子のクリちゃんは、強めにぎゅーっ！」

ヒロイン「やっ、ぁあああああ！」

柚樹「あはっ、もう腰ガクガクじゃん。
　クリちゃんぎゅっぎゅ気に入っちゃった？
　ボクだけの可愛いお人形さんのためなら、いくらでもしてあげる。
（※ＤＨＭ:⑦寄り）（※クリ責めがどんどん激しくなっていく）
　こねこね、ぎゅっぎゅ……ねえ、イキたい？　イキたいでしょ？
　いいよ？　イっていいよ？
　でもちゃんと『ユズちゃんイきます』って言いながらイクんだよ？
　あんっ、イきかけのその顔、可愛すぎるよ。
　いい、凄くいい……ふふっ、ほらイケ……イケ！」

ヒロイン「い、イきゅっ……ユズ……ユズちゃっ……い、イキますっ！　ああ！」

――ヒロイン絶頂を迎える
――倒れそうなヒロインを背後から抱きかかえる柚樹

ＤＨＭ:⑦寄り
柚樹「（★興奮気味で）
　ふ、ふふっ……可愛くイケたね～、偉い偉い。
　んっ……もうボク、我慢できない。
（※囁くように）
　ねえ……そろそろボクも、キミと一緒になりたいな」

○トラック3　背面立位・言葉責め・ドS・耳舐め

●収録区切り⑤

■場所：柚樹のお店『ヴェルドール』・試着室

■時間：昼ぐらい

――柚樹、背面立位の体位でヒロインに迫る

ヒロイン「あっ、ま、待って……あっ」

ＤＨＭ：④寄り

柚樹「ダーメ、待たない。
　ほら、ボクのおちんぽ、もうこんなになっちゃってるんだから」

ヒロイン「っ……！」

柚樹「キミとする初めての場所、色々と考えてたんだよ？
　ボクの家とかキミの家とかホテルとか、色々……。
　だけどやっぱり、この試着室でしたい、って思ってた。
（※ヤンデレモードＯＮ）
　……ボクにとってこのお店はお城のようなもので、
　とくにこの試着室は、ボクの人生が詰まった神聖な場所なの。
　ボクはね？　試着室で素敵な洋服を身に付ける度に、
　時が止まったような感覚に陥るんだ。
　男とか女とかいう『変化』なんか気にならなくなって、
　ただ、今のありのままのボク自身で時を止めてもらえるような、
　そういう感覚なんだけど……ふふっ、ちょっとわかりにくいかな？
　いいんだ、わかってもらえなくても。
　ただボクが伝えたいのは……『不変』。
『不変』ってわかる？　変わらないことを意味している言葉だよ。
　つまりね、この試着室の中で、ボクたちの関係を、
　永遠に変わらないモノとして時を止めてしまいたいんだ」

ヒロイン「永遠、に……？」

柚樹「(※間を置いて、やや狂気的に)
ぷっ……あはっ、ははは！
あぁ……やっぱりキミって安心する。全部話せちゃう。
もちろんこんなこと誰にも言ったことないし、
そもそも今のってさ、なんだかんだプロポーズしちゃってるよね？
えへへっ、あはは！
(DHM:③寄り)(★男モード寄りの声で)
……ね？　それじゃあ、さ。
これからボクたち此処で、最高に愛し合って、
そのまま時を止めちゃおっか？」

(SE:ヒロインの秘部の入り口に柚樹のペニスの亀頭が入る水音)

ヒロイン「っあ……」

DHM:④
柚樹「ふふっ、まだ先端しか入れてないのにビクンッてしちゃったね～。
ボクとの初めてなんだから、ゆっくり入れてあげる」

ヒロイン「ひっ、ぁ……ん、んぅ……」

柚樹「んっ……可愛い……体もおまんこも震えてるね。
ねえほら、根元まで入ったんだから、
鏡越しにボクたちが一つになってるところ、ちゃんと見て？」

ヒロイン「っ……！(鏡に映る自分の痴態を見て恥ずかしがる)」

DHM:③
柚樹「偉いね……でも……ふふっ。
キミのその素直で健気で可愛いところを見る度に、
いっぱいいっぱい虐めて、ボクだけのモノだってこと、
徹底的にわからせたくなっちゃうんだよね」
(※ヤンデレモードOFF)

ヒロイン「え……な、に……を……」

ＤＨＭ:③寄り
柚樹「（★男モード寄りの声で）
今から激しくピストンしてあげるから、ちゃんと鏡を見続けるんだよ？」

――柚樹、立ちバックの体勢でヒロインを激しく攻め始める

（★以降、柚樹はピストンを続ける）

ヒロイン「いっ、あ、ひっ、ひぁあああ！」

ＤＨＭ:⑤
柚樹「あっ、あっ、凄い、凄ぉい……っ！
後ろから一突きする度に、おまんこの中がビクビクってなって、
ボクのおちんぽ、丸呑みにされちゃってる。すっごく気持ちいい！」

ヒロイン「やっ、あ、あっ、ああ！」

ＤＨＭ:⑥寄り
柚樹「ねえ、ボクのおちんぽ好き？　気持ちいい？
カリでおまんこの中、ぐっちょぐちょに掻き回されて、
出し入れされるの好きになっちゃう？」

ヒロイン「ひっ、ひいいっ！　ゆ、ユズちゃ……ま、待って……ああ！」

柚樹「鏡見てみて？
立ったまま後ろからボクのおちんぽ出し入れされて、
『嬉しいです』『もっと欲しいです』って顔してる、
可愛くてエッチな子が映ってるよ？」

ヒロイン「やっ、言わなっ、いで……ぁあんっ！」

柚樹「気持ちいいならちゃんと言わなきゃお仕置きだからね？
それともキツめのお仕置きされたい？」

ヒロイン「んぅっ、お、お仕置き、やっ……嫌ぁ……！」

●収録区切り⑥

ＤＨＭ：⑥寄り
柚樹「ふふっ、お仕置きやだ？
（ＤＨＭ：⑦寄り）
じゃあ言って？
気持ちいい、って。素直に、正直に、ボクに言って？」

ヒロイン「あっ、あっ……き、気持ちいい……気持ちいい、よぉ……っ」

ＤＨＭ：⑦寄り
柚樹「ユズちゃんのおちんぽ気持ちいい？
ユズちゃんのおちんぽで、奥まで犯されるの好き？」

ヒロイン「好きっ、好きですっ……あ、あっ……ユズちゃ……っ」

ＤＨＭ：⑥
柚樹「えへへっ、ボクのおちんぽ好きになってくれて嬉しいなぁ。
ねえ……今キミを犯してるのは男の子かな？　女の子かな？
どっちの気分で攻められてるの？　教えて？」

ヒロイン「ひっ、あ、わかんな……わかんないよぉ……。
だって、ゆ、ユズくんは……ユズくん、だもん……っ」

柚樹「（※ヒロインの言葉に驚きと喜びを噛み締めながら）
ボクはボクだから、男とか女とか関係ない、って？
（※少し間を置いて）
（※ヤンデレモードＯＮ）
あぁもう……キミってどうしてそんなにボクを喜ばせてくれるの？
出会った時からずっと、ボクが欲しい言葉をキミは与えてくれる。
ボクが今、ありのままの自分で、心のままにいられるのは、
全部キミのお陰なんだ。
（ＤＨＭ：⑦寄り）
……愛してる。
男でも女でもなく、ボク自身が……キミを愛している」
（※ヤンデレモードＯＦＦ）

ヒロイン「んっ……ユズ、く……」

ＤＨＭ:⑥

柚樹「えへへっ、本当にボクと付き合ってくれてありがとう。
もうね、キミへの好きが止まらないんだ。
だからこのまま、すっごくすっごく気持ち良くさせて、イかせちゃうね？」

ヒロイン「え……？」

柚樹「ほらいくよ？
後ろからボクのおちんぽでガン攻めしてあげる」

（★ピストン／5秒）

ヒロイン「あっ、あぁ！　ま……待っ、って！　あぁああ！」

柚樹「エッチな声漏らしながら、顔トロけさせちゃってる～可愛い～！
ほらほら、もっと鏡見てさ、自分が誰のお人形さんなのか自覚して？
うん？　恥ずかしい？恥ずかしがってる姿も可愛いなぁ～」

（★ピストン／5秒）

ヒロイン「ひっ、ひぐぅ……あ、あっ、あぁあ！」

柚樹「ふふふ……もうイキそうだね？
エッチなアヘ顔、ちゃんと鏡に映して偉い偉い。
ご褒美に耳舐めも追加しちゃお～っと」

（★耳舐め＆ピストン／5秒）

ヒロイン「あ、ひっ、ひぃい！　み、耳ぃっ……あ、だめ、だめぇえ！」

ＤＨＭ:⑦
柚樹「耳舐め気に入った？
あんっ、もう……体もおまんこもブルブル震えてる。
イクまでちゃんと立ってるんだよ？　がんばれがんばれ！」

（★耳舐め＆ピストン／５秒）
ヒロイン「あっあっ、あぁああっ、い、イクっ、いっ……イっちゃ……！」

ＤＨＭ:⑥
柚樹「んっ……ボクもそろそろイク……。
一緒にだよ？　ユズちゃんと一緒にイかなきゃダメだからね？」

ヒロイン「ゆ、ユズ……ユズちゃ……あ、あぁあああ！」

――２人、共に絶頂を迎える
――へたり込みそうになるヒロインを抱え気味に立つ柚樹

ＤＨＭ:④
柚樹「（※息を整えながら）
は、ぁ……すっごく、気持ち良かった。
キミも気持ち良かったなら嬉しいな……」

ヒロイン「う、ん……」

柚樹「ボクたち、この試着室の中で愛を誓い合えたね。
だからさ……キミに着て欲しい服があるの」

ヒロイン「……え？」

ＤＨＭ:③
柚樹「（★男モード寄りの声で）
ボクの可愛いお人形さんを……花嫁姿でもっともっと愛したいんだ」

○トラック４　拘束・花嫁ごっこ・手マン・正常位・連続絶頂

●収録区切り⑦

■場所：柚樹のお店『ヴェルドール』・フロア・ソファの上

■時間：夕方ぐらい

――試着室から移動した２人

――インテリアとして置かれた店のソファの前に立たされるヒロイン

柚樹にウェディングドレスモチーフの服を着付けされている

（ＳＥ：服を着せられている衣擦れの音）

ＤＨＭ：⑨

柚樹「（※ヒロインを上から下まで確認しながら）

うん……これで良し、っと。

ごめんね、わざわざフロアのソファ前に移動させちゃって。

新しく着せたその服、どう？　着心地悪くない？」

ヒロイン「着心地は平気だけど……ユズくん、これって……」

柚樹「えへへっ、わかっちゃった？

その服が、ウェディングドレスモチーフで仕立てた洋服だ、って。

アクセサリーも靴も、ぜーんぶボクの手作り！

プリンセスラインのワンピースだから、ゆったり着れるでしょ？

ジャケットとの合わせ方で、カジュアルなシーンでも使えるし、

パニエとかでスカート部分を膨らませて、

更に甘い感じを盛るのもありだよね。

（※ヒロインを眺めながらうっとりとした調子で）

……絶対に、似合うと思ってた。

ボクの……ボクだけの愛しい花嫁さん。

最後の飾りつけをしようか」

ヒロイン「え……？　これで終わりじゃないの？」

ＤＨＭ：①
柚樹「うん、もうひとアレンジ加えたいんだ。
　このリボンをね？　こうやって……」
――柚樹、リボンを使ってヒロインの両手を前手で拘束する
ヒロイン「ゆ、ユズくん……っ？」
柚樹「ふふっ、キミの両手、リボンで縛っちゃったね？
　そのままさ……後ろのソファに座って？」
ヒロイン「え、でも……」
ＤＨＭ：③寄り
柚樹「……キミは今、ボクの何だっけ？
　可愛い可愛いお人形さん、だよね？
　……もう一回言うよ？
　そのまま、後ろのソファに座って？　ね？」
ヒロイン「……は、い」
――ヒロイン、ソファに座る
――柚樹、ヒロインの上に覆い被さるように近付く
ＤＨＭ：①
柚樹「ちゃんと言うこと聞けて偉いね～。
　イイコなお人形さんに、チューしてあげる」
（★ディープキス／5秒）
ヒロイン「んっ、ぅう……」
柚樹「あ……ボクのリップ、キミの唇にちょっと移っちゃった。
　でも意外とこの色も合ってるね。今度ボクのリップ貸してあげる」
ヒロイン「ゆ、ユズくん……」

柚樹「それじゃあ、このまま動かないでね？
まずは下着だけ、脱ぎ脱ぎさせちゃおーっと。脚は閉じちゃダメだよ？
うん……そう、そのまま……恥ずかしくても脚は開いていてね？」

――柚樹、ヒロインのパンツを脱がせ、そのまま手マンを始める

ヒロイン「ッー！」

柚樹「あれ？　またおまんこぐちょぐちょになってるよ？
さっきイったからって早すぎじゃない？　そ・れ・と・もぉ……
（ＤＨＭ：③寄り）
お手手拘束されて、お洋服着たままパンツ取られただけで興奮したの？」

ヒロイン「やっ……ひ、ぁあ！」

柚樹「ほら、キミのおまんこのエッチな音、お店の中に響き渡ってるよ？」

（★手マン／５秒）

ヒロイン「ぁあっ、ゆ、ユズく……ひ、ひぃいっ！」

ＤＨＭ：①
柚樹「ボクの指、三本も咥えちゃって……。
動かす度に嬉しい嬉しいって、おまんこキュンキュンしてるね。
まったく……エッチなお人形さんなんだから、もうっ」

（★手マン／５秒）

ヒロイン「あっ、あっ、イクっ、イっちゃ……あぁー」

柚樹「ん？　イきたい？　イきたいの？　そっかぁ……」

――鳴り止む水音
――柚樹、手マンをやめる

ヒロイン「……え？」

●収録区切り⑧

ＤＨＭ：①

柚樹「あはっ、指動かすの止めたらわかりやすくガッカリしてるねぇ。
あのままイきたかった？
ダメだよぉ。イくならちゃんとボクのおちんぽでイかなきゃ」

――柚樹、自身の硬くなったペニスを取り出す

柚樹「欲しい？　ボクのおちんぽ、奥まで入れてズボズボしてほしい？
ふふっ……だったらぁ、脚を広げて自分でおねだりしなきゃ。
『ユズちゃんのおちんぽください』……ってさ？
（ＤＨＭ：③寄り）
言えるよね？　ほら……言ってごらん？」

ヒロイン「っ……あ、ぅ……ゆ、ユズちゃんの……
お、おちんぽ……くださ、い……っ」

ＤＨＭ：③寄り

柚樹「（★男モード寄りの声で）
言えたね。よくできました。
ボクのおちんぽで、たっぷりご褒美ピストンしてあげなきゃね」

ＤＨＭ：①

柚樹「えへへっ……もうすんなり根元まで入っちゃったぁ」

ヒロイン「あ……あ……」

柚樹「じゃあ、お人形さんごっこできなくなるぐらい、イかせてあげるね？」

――着衣のまま正常位でセックスが始まる
（★ピストン運動／５秒）

ヒロイン「あっ、ああっ！　ゆ、ユズちゃ……激し……っ」

柚樹「試着室では後ろからだったけど、
こうやって向き合って、エッチな顔見せ合いっこするのもいいよね。
奥を突く度に、キミの顔がどんどんトロけていくの、最高だよ」

（★ピストン運動／5秒）

柚樹「ねえ？　普段は此処、お客さんいっぱい来る場所なんだよ？
あっー！　おまんこの中、ギュッてなったぁ。
思い出して恥ずかしくなっちゃった？　ふふっ、可愛い～！」

（★ピストン運動／5秒）

ヒロイン「ゆ、ユズちゃ……イって、りゅ……も……イって……っ」

柚樹「うん？　さっきから何回かイってるって？
うふふっ、知ってる～。
だけどキミのおまんこさ、もっとしてほしそうに、
必死にボクのおちんぽ締め付けて、媚び媚びするのやめないじゃん。
だからボクもぉ、奥までズボズボピストン、やめてあげなぁ～い」

（★ピストン運動／5秒）

柚樹「（※ヤンデレモードON）
あんっ、もう可愛い……可愛いよぉ……。
ボクのお洋服着て、ボクのお店のソファで、
ボクのおちんぽ嬉しそうにおまんこで咥えて、
ボクにトロトロの可愛いアヘ顔見せて、気持ち良さそうで……。
ダメだからね？　ボク以外にその顔見せちゃダメだからね？
っていうかボク以外のモノになるの、絶対禁止なんだからね？
ボクより可愛い子とか、ボクよりカッコイイ子に目移りしたら、
エッチな姿で拘束して、マネキンみたいにお店に飾っちゃうからね？
ねえわかった？　返事は？
ボクだけのモノってちゃんと誓って？　ほらぁ」

ヒロイン「ひっ、は……は、い……あっ、あっ！
わ、わた、し……ユズちゃんのっ……ユズちゃんのモノ、れすぅ！」

柚樹「……えへへっ。ボクのモノって誓ってくれたね。
あ、んっ……嬉しくってボクももうイく……っ」

（★ピストン運動／5秒）

ＤＨＭ:③寄り（※ヒロインを抱き締めるような体勢）
柚樹「あっ、あっ……おちんぽ溶ける……気持ちいい……っ。
一生ボクのモノだから。
ボクとキミの愛は、永遠に変わらないから。
……愛してる。愛してる。好き……大好きだよぉ……っ」

――柚樹、絶頂を迎える
――呼吸を整えながら、柚樹、ヒロインの顔を愛しそうに撫でる

（★柚樹、ヒロインのおでこにチュー）

ＤＨＭ:①寄り
柚樹「ふふっ……意識飛ぶぐらい気持ち良かったんだぁ……。
このまま眠ったキミをこのお店の中に閉じ込めちゃいたいなぁ。
（ＤＨＭ:③寄り）（※少し間を置いて）
……なんてね？」
（※ヤンデレモードＯＦＦ）

○トラック5　エピローグ・キス

●収録区切り⑨

■場所：柚樹のお店『ヴェルドール』・フロア・ソファの上

■時間：夜に差し掛かるぐらい

――柚樹、ソファの上でヒロインに膝枕をしながら頭を撫でている

――右耳を上にして横になっていたヒロインが、目を覚まし体を起こす

ＤＨＭ：⑮→⑨（※ヒロインが起きて向き合う体勢へ移る）

柚樹「ん……ああ、起きた？

よく眠ってたね。えへへ、そんなに気持ち良かった？

（※ヒロイン起き上がる）

あ……まだボクの膝枕、堪能してていいのに。

ふふ……改めておはよう、ボクの可愛い花嫁さん」

（★ディープキス／3秒）

ＤＨＭ：①

柚樹「キミとのチューって、甘くて大好きなんだ。

何回でもしたくなっちゃう」

（★ヒロインの右頬に軽くキス）

ＤＨＭ：①

柚樹「お人形さんから、ボクだけの花嫁になった気分はどう？

キミはいきなりのように感じたかもしれないけど、

ボクはキミに告白したあの時から、

ずっとずっとこの日が待ち遠しかったんだよ？」

ヒロイン「ユズくん……。えっと、最初は突然でビックリしたけど……

でも、うん……嬉しいよ」

柚樹『嬉しい』って思ってくれるの？　えへへっ、ボクこそ嬉しいなぁ」

（★ヒロインの左頬に軽くキス）

柚樹「ボクはさ、これからも男として、男の娘(おとこのこ)として、
一番キミに似合う服を選んで、最もキミに似合うメイクをして、
それで……誰よりもキミを可愛がって、愛し続けるよ。
この想いは絶対に変わらない。変わることは無いんだ。
だから……ね？」

――柚樹、ヒロインに顔を近付け耳元で囁く

ＤＨＭ:①寄り
柚樹「キミのボクへの愛も、永遠に変わらないモノであってほしいな。
永遠に美しく、可愛く、愛し合い続けたい。
もしもボクへの愛を裏切るって言うなら……
(※ＤＨＭ:③寄り)(★男モード寄りの声で)
きっとボクはキミを、本物のお人形さんみたいに動けなくさせて、
永遠にボクの家に飾っちゃうかもしれないなぁ」

ヒロイン「っ……！」

ＤＨＭ:③寄り→①
柚樹「ふ、ふふっ……えへへ、なんちゃって。
恐がるキミの顔も可愛いから、ちょっと意地悪言っちゃった。ごめんね？
大丈夫。ボクはキミを信じてるし、
ボクほどキミを必要としている人間はいないって、わからせてあげる」

(★ヒロインの唇に軽くキス)

ＤＨＭ:①
柚樹「愛してるよ。これからもボクは、最高級の可愛さと、
最上級の愛を、キミに……キミだけに捧げていくからね……」

【ＥＮＤ】